

151 文徳マサー（口）（空手の修行）

この人も年寄りになってから、六十ぐらいになってから、若い時は漁業だったからね。漁業の時よ、みんな寝ておる時よ、必ず夜中一回は出て行って、空手の練習を。やらなかったらなまるから。だから、出て行くのがみんな一回もわからん。どんなに出て行くか。帰ってくるのはわかる。みんな並んで寝ておるところからよ、夜中から、人には見られないで、この人はね。普通の人とはわざと見せているけど、人には見せない。だから、夜中出て行って。空手やらんなまるからといって。だから、帰ってくるのはわかる。出て行くのはわからん。普通の人にはわからんと。

だから一回よ、海がしくてよ、沖出られない時よ、この人が一番弱いと。弱いと飯炊きさ。飯炊き連れてきて、空手の基本。この人が。若いのは何もわからんわけですよ。だから空手の基本で、型をするって、しよったですよ。型。あの強い人とこれと倒せるかといっ

て、絶対動かない。あれからはみんなをやっぱし、名人だなあと思って。なにもわからん人でも、この人が空手のコツで強くする術を、筋肉もりもりと。だから、強い人でも倒されたって。しけの時、みんなの目の前で。あの時から、この人を本当、名人だなあということ。

字糸満 大城英次